

他人の恣意で叶う願いは、シャボン玉のように、ふんわり、浮き上がる眩きだけ。名前も知らないゲームを、気付かないうちに、スタート。気付かないうちに、魔法にかかってしまった。

気付かないうちに、境界線を作って、

気付かないうちに、鈍感になってしまっただけ、気付かないうちに、遠いと、絶望して諦めてしまう。そんな臆病な人に、どうして、なってしまったのだろう。

大人は、自分とは違う生き物で、それになる事なんて疑わなかった。そして、男と女は同じ生き物で、曖昧な形が少し違うだけ、暗い所で、一人、泣いたり、誰かをずっと見ていたり、胸が痛くて、好きな人を見つけたくなったりするんだ。

一緒にだよね。  
好きなものは好きで、やりたい事は沢山あって、お腹もすいて、美味しいものは食べたい、欲しいものは、ぎゅっと抱きしめたい。

同じだよ。閉じてしまっても良いよ、それでも笑って夜更かしできる。だから、

もしもの魔法で、あの子と同じ形になったとしても、きつと、僕は僕で、君は君のまま。なにも変わらないで、また、一緒に遊んでくれるよね。青白い夜が明けても、子供の頃からのゲームの続きで。

偶然と気まぐれの違いが分かる人は、ちよつと偉いと思う。その日、予定もなく家を出て、公園のベンチでのんびりご隠居さんの真似事をしていた。本当のご隠居さんは、きつと趣味を満喫するために忙しいと思うけど、オレは暇だった。

カメラを片手に、ベンチに座って、偶に周囲の木や遊具を撮ったりして、時間を消費。

どれだけの時間が経ったか分からない。公園は静か。遊び回る子供もいなければ、散歩する犬もない。ただ風が通りすぎては、木々が挨拶するぐらい。その静けさに、オレは、シャッターをきった。

しばらく一人。日差しが心地良くて、うとうとしていた。だから、お爺さんがいつ現れたのか分からなかった。

お爺さんに気付いたのは、プラスチックが転がるような音がしてから。それで目を覚ました。お爺さんは、木の下で両手を伸ばして、何かの体操かと思っただけ、手の先を見ると、木の枝に赤い飛行機があった。玩具屋で見かけたことがある物より、少し大きいラジコン飛行機。きつとうっかり木に引っかかったのだろう。

お爺さんは少し慌てた様子だった。大切な物のようだ。オレは周囲を見た。誰もいない。飛行機が引っかかっている木を見た。

立ち上がり、お爺さんに近づいた。

「あの飛行機、お爺さんの？」  
ゆっくり、普段より少し音量を上げて声をかけると、お爺さんはオレの方を振り向いて頷いた。

オレは頷いて、一度見上げて木を登った。

幸いな事に、足がかけられる場所に枝がある松の木だったから、登るのに苦労はなかった。むしろ取った飛行機を落としたり、傷つけたりしないようにするのが苦労した。

飛行機を渡すと、ありがとうございます、とお爺さんは頭を下げて丁寧な礼を言った。とても紳士的な印象だ。嬉しそうに飛行機を抱えて、とても若々しく見えた。

「こんなものしかありませんが」  
お爺さんは小さな紙袋をオレに渡した。

「あの……これ、なんですか」  
「どらやきですよ」

お爺さんはお礼に、お菓子をくれた。両手に収まりきらない大きさの茶色い紙袋。その中身は、どら焼きらしい。ちよつと困って、どらやきを凝視。

「あなたの望みを叶える、魔法のどら焼きです」

まるで魔法使用のような言葉が聞こえ、視線を上げた。すると、もう、お爺さんはいなかった。遠くから低いエンジン音が聞こえる。

きつともつと広い所で飛行機を飛ばすのだろう。オレは、貰ったお菓子をどうしようかと思つた。オレは、あんこが嫌いだ。

でも、断るのも悪い気がして受け取つた。さて、今度はちゃんと計画しよう。

どうしようかな、この、どら焼き。

2

炬燵……床に炬燵を設け、上にやぐらを置き、ふとんを掛けて暖をとるもの。掘りごたつ。また、簡便にやぐらの底に板を張ってこれに火入れをおく置きごたつや、電気ごたつなどもある。室町時代に禅宗から広まり、古くは、やぐらそのものをこたつと呼んだ。害のないように思える炬燵、その見かけは、プロレスのリング上にあつたら強烈な凶器になりかねないが、幸いここはリング上ではない。しがたない男子高校生が寄生しているポロアパートの一室なのです。そして炬燵は凶器にはならず、ちゃんと暖房器具としてしっかり働いている。

僕はぬくぬく。

お椀型ヘッドホンでお気に入りのクラシックを聴きながら勉強中なのです。かりかり。

一日中、鉛筆もって参考書と実弾演習、かりかりと。買い溜めしたプラモデルが早く作つてよーとベッドの下で僕に訴えてくる、それを僕は涙と眠気を払って勉強にいそしむのです。かりかり。

受験生って不健康だよー……。

冬休みかー……。

ああ、天気が良いねー、塗装日よりじゃん。かりかり。

朝から静かだった。皆さん実家に帰省されたようなので、現在このアパートには僕しかいないって、大家さんが昨日言つていた、……工作好機じゃん。ディスクサンダーや電動リユータ使い放題、ついでに玄関のよこに隠れているボール盤も使えるし、今から家庭用溶接機でも買いいいこうかしら、おほほじゃないか。

くそー、神様は僕がお嫌いなのですか？ ……落ち着こう、取り乱してはダメだ。内心狂喜乱舞していても、実際に狂喜乱舞してはアパートから追放されかねない。あと、数ヶ月の辛抱だ。

受験が終われば、時間を稼いで仕事をしよう。今はそのための修行じゃ。目の前ににんじんをぶらさげながら走る馬じゃ。走れ、走るのだ、突っ走れ……、いや、座つて勉強すればいい。かりかり。……でも、目の前ににんじんをぶら下げられて走る馬って見たことないな、きつと賢い馬が多いのだろう。

うううん。ちよつと足が熱いな。

面倒なのだよね、温度調整するのに炬燵の中に潜らないといけないから、でも、このままだと低温火傷しそうだし……しかたないな、かりかり。布団をめくれば、そこは赤原だった、みたいな。ちよつと臭うな、芳香剤でもいれてみる？ なんか異臭騒ぎになりそうだからやめよう、それよりも温度を下げないと顔面サウナだよえつと、強から弱へと。面倒だな、電源スイッチはコードについているのに、なんで温度調整は炬燵の中なのさ……今度作ろうかな。なにが必要かな、まずハンドゴテはあるな……あれ、ハンドダどこやったかな。ま、いっか、やめとこ。君子熱きには近寄らずつてね。あれ、違つたけ。うん、熱いな。出よう。

わ！

びっくりしたなもー。炬燵から出ると半屋くんがいるんだもん。

「もー、脅かさないでよ」

「驚いたのはこつちだ。いくら呼んでも返事がないから、入つてみれば、頭隠して尻隠さずをやつてるから、新手の宗教に入信したのかと思つたぞ」

仁王立ちで僕を見下ろすヤンキー。誰だつて、いきなり透けるような金髪に、ピアスと安全ピンつけた敵つ奴がいたら、驚くでしょ。ついでに、僕は特定の宗教法人に入信しておりませんので。

「暇だ」

半屋はそう言つて、座つて、炬燵に足を入れた。

「見てわかんない？ 僕、勉強中」

よくも炬燵の上に縦列駐車している参考書を見て、退屈だなんて言えるよな。「分かつていても暇なものは暇だ。オレは暇だ。だから遊びに来た」

簡潔だ。天板に顎を付けて、僕を睨む。睨まれても僕は遊びなんて行けないですよ。勉強がなくなつて、こいつと外に出たら怖いし、特に夜は。

机の上に置いてあるロボット型目覚まし時計をみると、もう八時、夜ですよ。一日中カーテンしていたから、気にならなかつたけど、きつとそとは暗いし寒いし、

乾燥しているだろうな。

「なーピカちゃん、ガンブラ作らせてー」

粘性の高い声でヤンキーがねだる。まったく可愛くない。

崎河ヒカルが僕の名前だけど、ピカちゃんなんて渾名は半屋しか呼ばない。Pちやんでなくて良かったとは思う。

「ダメ」

勉強再開。かりかり。

「えー、だったら、飯をくれ」

本命はそれかい！

薄々分かっていたよ。半屋がこの時間にくる理由なんて、腹が減ったか髪を染めるを手伝わせるぐらいしかないんだもん。

「あのね。暇だったらバイトでもして、おいしいご飯を食べればいいじゃん」

「だってー、オレちゃま受験生だもん」

「嘘つけ」

幼児退行するヤンキー。可愛くない。

この世の不条理を信じさせられた事があった。それは、半屋が推薦入試で既に、第一希望の大学に受かっていることだった、しかも国立、ついでにそこが僕の第一志望大学。……どんな裏技を使ったか決して半屋は言わない。そうだろうね、本当の裏技なんて誰にも言わないよね。

「たのむよーお腹すいたよー、お腹とハラがくっついちゃうよー」

「どっちもハラだろ」

「頼む。なにか恵んでくださいピカ様ー」

手を合わせ天板にデコをつけて、ギブミーフードと繰り返す言う半屋。

「はいはい、わかりましたよ」

なんて残酷な奴だ。せつかくぬくぬくかりかりと勉強してたのに、炬燵から追いつすなんて……。僕は立ち上がって、半屋を見下ろした。

「僕だってお腹すいてるんだぞ」

「ちようどいいじゃん。ぱーっとなんか作ってくれよ」

「インスタントもないから、朝の味噌汁の残りしかないけど、それでもいい？」

「ぐーぐー。ついでに米つけてー」

「調子のんな」

僕は台所へ。

「待ってるよダーリン」

「あほかっ」

コンロに火を付けて、味噌汁を暖め直す。具は無い。豆腐ぐらいなら買い置きして有ったよう……。

「半屋、賞味期限が過ぎてても大丈夫？」

「はあ？ 今朝作ったんだろ。ま、賞味期限如きに負けるオレ様の胃じゃないぜ」  
いつものオレ様発言。

大丈夫なら、冷蔵庫の余り物を味噌汁に入れて処分しよう。まずは豆腐と納豆、キャベツになめこと……。マヨネーズ。どんな味になるやら、神さえ逃げるだろう。  
「おいピカちゃん」

呼ばれて振り返ると、炬燵に下半身を入れて半屋が仰向けにこつちを見ている。

熱湯を願上からぶちまけてやりたくなるポーズ。

「腹へってるなら、これやるよ」

仰向けのまま、器用に何かを僕に投げた。手にとってみるとそれは小さな紙袋だった。掌大の軽くて柔らかいもの。

「なにこれ？」

「どら焼きだよん」

「なんだ、ちゃんとエサ持ってるじゃん」

「だーめ。オレ様、あんこ嫌いだもん」

「ふうん。だったらいただくよ」

「おう。ぶつぶつ交換」

紙袋を開けると、まさしくどら焼きだった。うん、甘そうだな。では、お構いなくいただきます。……あら、おいしいじゃありませんか。もったいないな、こんな美味しい物ほっとくなんて。よし、少しずつ味わって食べよう。

「ピカちゃんまだー」

「まーだだよー」

「早くしよー早くー」

「どんだけ飢えてるんだよ」

「かれこれ一年以上、彼女がおりません」

「そっぢゃない変態」

「そうだな、男の変態なんて最悪だよな。オマエも部屋に籠もって模型なんて作っていないで、彼女でもつくれよ。彼氏がいない女より、彼女のいない男のほうが変態っぽいぜ、おまけに模型オタク。うわ、い・やん」

「ごろごろと悶えるヤンキー」

なんて偏見だ。差別だ、無礼だ、妄想だ。なんだって恋人がいる方が善いなんて思うのだ、そんななのが健全か？ 僕の精神状態は教科書のように健全なのだ。だから、部屋に籠って模型作ってなにが悪い。部屋から出て騒音まき散らして、他人に迷惑かけるずっと良い状態だ。

多いよ。昔からだよ、そういう偏見。偏見だけならまだ良いさ、それを口にするのが迷惑だ。陰口は影で言えよな、日陰者。

女だったら良いのか？ 趣味に没頭するだけでそんな迫害うけないといけないなら、僕だって女に産まれたかったよ、お母様。

ああ、女になりたいなあ……………。

なんて、ぼやいてもしかたない。

迫害には迫撃で、偏見には偏食で、無礼には無情で、それが僕の流儀。

白濁色の、もはや味噌汁と言え、詐欺っぽい粘塑性体を振る舞って差し上げようではないか。聞こえるぞ、ぐつぐつと地獄の協奏曲が聞こえるぞ。一体どんな味になっていんだ。おもわず食べかけのどら焼きを落としそうになるほどの、強烈な匂いがする。味見……してみようか。

お玉にほんの少し汁をよそって、ちよろつと舐めてみる。  
べろり……………。どら焼きどら焼き、口直し。

「さらば半屋」祈りましょう、アーメン。

あんこの甘みが舌をやさしく撫でてくれる。

ああ、いいな……………。

あれ、ぴりつとしたぞ。なんだろ？ 乾燥剤を噛んだのかな…。

あ、くらくら、眩暈。

どうして…？ あれ、曲がつてる。お鍋が、歪んでるよ。

いや、ちがう。痺れる。舌が……………。あ、頬も、うそ、震えてる？

味噌汁のせい？

うわ、どうしよ。眩暈が……………。

ちよつとしか、舐めてないのに。あれが致死量？

まずいよ。うん、まずい。

すーつと、脳が縮んでいく……………。

酸素が、神経が、切れていく、断線してく。

あ、どうしよ、味噌汁。

だめだよ、早く捨てなきゃ、こんなの、食べたなら、半屋も、死んじゃう。

あ……、死ぬのか、僕？

ああ、そうだな、死ぬね。だって、墜ちてるもん。

地面がフルーチェみたいに、僕を支えてくれない、沈没を歓迎されてる。

ふわーんって、墜ちてるよ。

あ、遠い。閉じていく。

どうしよ……………。

視界が霞む。身体が、離れていく、届かない。

萎んで、落ちて行く。

さようならを言えって、内側から誰かが叫んでいる。

そっか、さようなら、か……………。

ごめん。味噌汁、残していきます。  
でも食べないでね。

タダイマ ヨミコンデイマス モウ シバラクオマチクダサイ

3

抵抗が羽根になる。

摩擦音がオーケストラ。

昇って 墜ちて 回って 墜ちて 垂直 水平 斜めにくるくる墮ちいく。

粘性の高い雲 触れて 離れて しがみつく。

広がる青と、楕円の青が交わって出来る霞んだ白。

丘の上に教会が見える。

ごろんごろん、と鐘がなる。

結婚式だ、お祝いだ。

白い花びらが舞っている。高く高く舞い上がる

僕も祝おう。回って回って墜ちていくけど、祝いましょう。

花嫁の紅潮した頬。

誰もが喜び上げて拍手する。

花嫁は俯き、頬を更に赤くする。

神父が微笑み、シスター達が歌を上げる。

だれもが喜びを疑わない 花嫁が幸せに照れていると疑わない。

だけど僕だけ知っている、

花嫁を染める色は、裏切りに恥じらう紅なのだ。

ぼくだけが知っている。

ごろんごろん、と鐘がなる

カモメが歌う。北は遠い、地上はまだ遠いぞ、とカモメが歌う。群れて飛び回り

歌って墜ちる。

騒がしい群れ。鳴り響く騒音。

カモメが鳴く。カモメが呼ぶ。

いや…………、違う。あれはサーカスだ。

沢山の笑いと色を乗せてやってくる。猛獣たちも今宵は淑やかな紳士。子供達はお留守番。大人だけで楽しむサーカス。だって子供には当たり前で退屈なショーばかり。

ここは悪戯と愛嬌の銀行だ。忙しさを装って、色々落としてきた大人のためのサ

ーカス。

落とし物は預かっていますよ。今宵はそれをお返しします。それを捨てるも拾うも貴方次第。

玉乗りするピエロがおどけて転ぶ。

ひっこめピエロ。

靴下片方忘れてるぞ。

今度は綱渡りに挑戦かい。

ひっこめピエロ。

僕が代わりにやってやる。

さあおまちかねの危険な綱渡りだ、

さっさと歩けピエロ。

すたすたすたすた 僕は歩く

のろのろのろのろ ピエロが歩く

ら 簡単な綱なんて太い太い。親切安心安全の舗装道路さ、へっへへ。

下は遠い。

でももっと高い所から僕は墜ちてきたんだ、ほっほほ。

ひっこめピエロ。

そんな陽気なステップみせても退屈だ。オマエは水溜まりで遊ぶ小学生のつもり

か。

さあもっと危険なワザをお見せしましょう。

ほら、っは、っほ、んーっの。

ハイ ブラボー ファンタスティックだっばっばっば。

ぎーこーぎーこー ロープが揺れる。

きりきりきりきり ピエロが回る。

あらら、ピエロの落下。

真っ逆さま。見事に回って回って回って狂って回って墜ちていく。

観客が静まりかえる。

なんだよもっと騒げよ。

もっと音楽を鳴らせ。

ピエロが生まれ変わろうとしてるんだ。

ほらほら、激しいステップ

酔った喝采

暗闇の歌を

もっと聴かせてやれ。

狂った音楽

狂ったピエロ

ぎりぎりぎりぎり 欠けていく

すーすーすーすー ピエロが墜ちる。

そう墜ちるんだ。どこまでもどこまでも墜ちるんだ。どこへ墜ちるはしらない。

僕もまだ落下中。まだ終わってないない。

そうだ。まだ、僕は墜ちてる。

ほらほら

ピエロが墜ちていく

それがいつの間にか

墜ちているのは、僕だった。

観客は居ない。

音楽はない。

淡々と墜ちていく

墜ちていく

どこへ？ 下へ 上へ それとも中心へ 境界の外？ 内？

観測者は誰？ 墜ちてるの？ 昇ってるの？ ピエロはどこにいるの。

落下中に夢を見た。

小さなレンズをのぞき込む。

かりかりかりかり 音を立てる

フィルムが音を立てて回ってる。

生まれてから

墜ちていくまで

数年が数秒で回っていく。

色褪せた映像が それが僕の一生だと囁く。

っはは。

レコードが悲鳴をあげて回っている。

硝子がすやすや眠っても、回っている

天秤が荘厳な顔つきでも、回っている

やっぱフィルムは音を立てて回っている。

すべてが回る。

くるくる回る。

それとも僕だけが、回ってるのかな。

ま、いいや。

さあ、墜ちていくぞ。

地上はまだ遠い、と月が叫ぶ。

うるさい！

僕は一人で墜ちていく。

誰もついてくるな、誰もみるな、一人にしてくれよ。

ああ、……………でも、

たまには顔を見せてね。

4

「ひっこめピエロ！」

僕は叫んだ。そして、目を覚ました。

「うわっ、びっくりした……大丈夫かピカちゃん」

横から半屋くんの声がした。視線を声の方へ向けると、背中が、少し視線をあげると顔があった。色々装飾された顔。半屋くんだ。

空白の思考。……落ち着こう。目を瞑って、深呼吸して目を開ける。

まず確認です、僕は誰？ 崎河ヒカルです。ヒカルという名前ですが、性格の照度は低めと自負しております。そして、ここはどこ？ ……おんぼろアパートの101号室、僕が借りている部屋。なにしているの……、ベッドで仰向けになっています。なんで……えっと倒れたのかな、地獄の協奏曲を奏でる味噌汁を味見したから……、あ。

「ねえ、味噌汁は？」

「ん。わりなあ、勝手に喰ってるよ」

僕は少し身体を起こし、炬燵の上を見た。すると、どんぶりに白濁色の液が注がれている。半屋は、ベッドを背もたれにした特等席に座ってその味噌汁だった物を食べているようだ。しかも、美味しそうに。

「ねえ、大丈夫？」

「あ？ うめえよこれよ。もうこれが最後だからピカちゃんのねえーよ、ごめんね」  
少し味見しただけで眩暈を起こすような科学兵器めいたものを、平気で飲み干す変態半屋くん。伊達にオレ様の胃はすごいぞとは言っていない。もしかして半屋くんの胃はチタン製ではないのだろうか。なんか、胃もたれしそうだな。

「それより、大丈夫かピカちゃん。いきなり倒れるからびっくりしたぞオレ様」

「うん。もう大丈夫。……ところで、この部屋熱くない？」

「いんや。むしろ寒い」

「あれ、ほかほかしてるけど」

「おいおい、熱でもあるんじゃないのか」

「熱はあるよ。生きているんだもん」

「そうじゃないくて、ちょっとじっとしろ」

半屋がベッドに片膝乗せて、僕に覆い被さるように接近。無言で、僕のおでこに手を当てた。堅い手。黙って自分のおでこにも手をあてて、熱を計っているみたい。

息苦しい。なんで呼吸を止めているのだろう、僕は。

「ああ、熱いぞ」半屋は手を離して、少し離れた。どきどき。

「風邪ひいたか」

「医者じゃないから分からないよ」

「でも熱いぞ」

「うん、なんか、ほかほかしてる」

じっと、半屋が僕をみる。

僕も半屋を見る。

黙って睨んで、半屋が徐々に近づいてくる。ただ顔を近づけて、じっと僕をみる。

僕も半屋をじっと見る。

こんなに接近して顔をまじまじと見合わせた事、今まで無かったけど……うん、やっぱり重たそうな顔してるな。体積は平均的だと思っけど、装飾が多い。耳には銀製のピアスが五つ、かなり年が入っている。まゆ毛の位置に安全ピンが三つ、何をとめているのか、どんな安全が欲しいのかよくわからん。そして安全ピンと耳のピアスを繋ぐチェーン、細いが長い。見ているだけで痛々しい顔面。オマケにおでこに入れ墨。どんな神経しているのか不思議だ。きつと二三力所神経が切れているのだろう。安全ピンで止めてはどうかと薦めてみよう今度。

半屋の頬が、ちよつと赤い。

顔色は悪くなさそうだ。あんな強烈な科学薬品を飲み干して、よく無事でいられる。あれ？ よく見ると肌が綺麗だ。産毛も処理している。几帳面な奴だな、意外だ。しかも歯も白いし。たばこ吸ってそうだけど……いけないな、人を見た目で予測しては。

息苦しい。いつまで黙って見つめ合っているつもりだろう……。

「おい、ピカちゃん」

ようやく半屋が喋った。なんか目が、珍獣発見みたな目つき。

「それ、なに」攻撃的に指す。

それを視線で辿ると、僕の胸の辺りだった。

胸。うん、胸だね。……あれ、え、はい？

がっばと布団を被って、半屋の視線から逃れるように横を向く。

え、つと、ふくらみがある。

二つ。

メロンパンを入れた覚えはない。



「なに？」

半屋がゆっくりと顔を上げた。

「おまえ、男だよな」真剣な表情で、訊く。

「うん」表情繕えず答えた。

「今、女になってる」

「そしてみたい」

「なんで？」

「僕が知りたい」

今度は僕が頭を天板につけた。

「そうだよ、僕が知りたいよ、なんで急に女になったのか……。教えてください。

今だったら神の声なんていう空耳か、違法電波もちゃんと耳を傾けます。来年はち

ゃんと初詣に行きます。もう和尚さんの説法に水をさすようなことはしませんから、

なんでこんなことになったのか、どうか教えてください。

「ピカちゃん、落ちていて考えてみよう」

腕を組んで、片目を閉じて半屋が言う。

「僕は落ち着いているよ」

「まず、ピカちゃんは目が覚めたら女になっていた。そうだな」

「うん」

「じゃあ、いつ女になったか」

「えっと……気絶してる間じゃないの？」

三秒ほど半屋は、目を瞑って、眉間に皺を寄せて目を開けた。

「では、なぜ気絶したかだ。たぶん、それが原因で女になったはずだ」

「なぜ気絶したか……、えっと、味見をしたんだよ。その味噌汁の味見」

二人の間に鎮座するどんぶりを指さした。

半屋の顔が強張る。

「とんでもない味で、眩暈がしたんだ」

「おい……じゃあ、なにか、その味噌汁飲んだから性転換？」

「……そうじゃないの？」自信がないけど、相づちを打つ。

「おいちょっと待てよ。オマエが味見で性転換なら、オレはどんぶり一杯飲んじま

つてんだぞ。どうなんだ、オレは力カシしかロボットにでもなっちまうのかよ」

こたつをたたき、立ちあがって叫ぶヤンキー。顔色が、衰退していくように見え

た。

でも、そうかもしれない。僕がちよっと舐めて女になったなら、どんぶり一杯飲ん

だ半屋くんは、人間以外のものになるかもしれない。……嫌だな、力カシの友達なん

で、まるで鏡の国のアリスだ。

「でもさ、半屋。平気だよね」

「お、おう。平気も平気。むしろ余は満腹じゃ」

「だったら、違うのかな」

「そう祈る。……他に何かしなかったか」

半屋が、肩を持ち上げ深呼吸をしながら、座った。

僕は、目を瞑って記憶を遡ってみた。強制わいせつ辺りは飛ばして。

「味見して、口直しにどら焼きたべて、眩暈が」

「どら焼き？」

「そう、おまえがくれたどら焼き。あれも食べた」

「あ、……ああ……」半屋くんが両肘つけて頭を抱えている。

そのまましばらく黙った。

「あれさ……」俯いたまま、湿っぽい声を出した。

「実は、人から貰ったものなんだ。……たまたま公園で困っていた爺さん助けたら、

お礼にしてくれたんだ」

「へえ、えらいじゃん」

ちよっと驚いて、素直に褒めてあげると、半屋はぎこちない微笑みを浮かべたが、

それはすぐに消えてしまい、話を続けた。

「その爺さん変な事言ってたんだよ、たしか……」

半屋が頭を抱えたまま、顔を起こす。

僕を見る。

「……、『あなたの望みを叶える、魔法のどら焼きです』って」

「へえ……え？」

魔法のどら焼きが願いを叶える。

僕は、願ってしまったらしい。

そして叶ってしまったようだ。

身に覚えの無い、きつと、嘔きのような小さな願いだったはず。

なのに、ぼくは、ちつとも嬉しくもなければ、悲しくもない。

僕は、どら焼きを食べて男から女に変わりました。

それは高校三年生、ちよっとコーラが唇に染みて痛い、乾燥した玄冬の夜。

残念な事に、半屋くんはカカシやウサギにも、ついでにロボットにも成りませんでした。ただ、僕は女の子になりました。どら焼きを食べて気絶して、目が覚めたら女の子。まるで夢のような出来事だけど、夢ではなかった。

強姦的な友人・半屋くんとその夜遅くまで、あーだ、こーだと色々騒いでしまった主に僕が暴れていたらしい。だって急に性別が変わるのですよ、奥さん。十代の男子高校生にとっては一大事件の即迷宮入りですよ。悩みました。考えました。家族には何て説明しよう、学校はどうしよう、運転免許はとれるの？健康診断はどう誤魔化したいいの、下着はどうしよう…、家賃滞納しているのだよ、お腹すいたな、模造作りたいな、飛行機飛ばしたいな…等々。

どうしようどうしよう、と壺の魔人を呼び出すかの如く繰り返して呟いていた、らしい。

だけどね、僕はお手軽、気安い、スムーズなお年頃なのです。だってまだ十八才だもん。何時間も喚いたり悩んだり慌てたりなんて格好わるい事しない。

半屋がこっそり、僕の財布から千円札を盗んでコンビニで缶中ハイを買って戻ってきたときには、もう、普段どおりです。

「慌てるな、半屋くん性別なんてクローズドな情報だ。どうとだって偽装できるし、それ自体は人の尊厳となんら関係はない。身体は他人のようでも、心まで他人ではない。……っふ、本当に慌てるべき事などこの世にはないのだよ、半屋くん」

二つ目の缶を開けて、そう力説した。

「……負け惜しみに聞こえるよ、ピカちゃん」  
そんな半屋の言葉にも僕はめげないのだ。

そうだ。この程度の事でいつまでも鬱ぎ込んでいられない。

認めよう。僕は女の子です。

だからどうしたってんだ！

文句あるなら、受け付けるぞ。

ただし、受付窓口がどこにあるかは秘密です。

翌日、いつものように起きて、顔を洗って、二度寝する。いつもと同じような日だった。いや、二日酔いと闘いながら受験勉強再開。昨夜の遅れを取り戻すように僕は部屋に籠もって、炬燵に入り浸って、教科書と参考書とノートのフォーメーションで冬休みを戦い抜いた。

そうだ、大晦日も元旦も受験があるからと実家には帰らず、僕は部屋に籠もった。修行だ。まるで山ごもりのように部屋に籠もった。お気に入りの音楽を聴きながら、

かりかりかり、勉強していた。一日中、お勉強。部屋から一步も出る事もなかった。だから、誰とも会わず、素敵な孤独に出逢えました。と、思ったが、夜になると半屋がやってくるようになった。毎日、大晦日も元旦も。しかも、食料を持ってくる刃り気持ち悪さはある。

そして冬休みも終わり、明日から学校が始まる夜も、半屋くんは事前の連絡もなく、我が小部屋に強襲してきた。

「ピカちゃん、明日から学校どうすんの？」

持参した弁当を食べながら、半屋が訊いた。

「どうするって、もちろん行くよ」

「え、マジッスかピカさん」

「なんで敬語なんだよ。というより、退くな」

「だってよ、男子校だぞ」

「言われなくても知ってるよ。三年通っているのだから」

「胸はどうすんだよ、胸は。即バレするって。胸筋にしては大きいし、見事な美乳だからよ。揉んだオレ様が保証する、自信持て」

「うるさい変態。嫌な事思い出させるなよ、むずむずしてくる」

半屋が献上してくれたカップラーメンをすすする。

「制服着れば大丈夫だよ。入学した時に成長するだろうと思って、大きいサイズの買ったんだ……でも著しい成長がないため現在もだぼだぼ……それに、厚着すれば胸は誤魔化せる」

ラーメンをすすらず。片手でかりかり。

半屋くんが、疑問と心配の眼差しを向ける。

「大丈夫だって。うちの学校の連中、鈍感偏差値は、ずば高いからさ、バレやしな

いって」

そう、バレはしなかった。

大丈夫だと豪語したものに、内心はどきどきで登校してみたが、なんの事はない。誰も気づきやしなかった。痩せたな、風邪でもひいたのか、太ったな、とか言う方がいらっしやいました。まさか冬休みの間に男から女になったなんて誰も思いもしなかっただろう。気楽なものだ。僕は教室でどれだけ情緒不安定な状態になっていたことか……。もしこの場で女性になったとばれたら、と不安で色々と予測していた。女になった時、半屋の行動が人類的に悪夢だったので、精神衛生上よろしくない想像ばかり浮かんで、気分は最下級だった。

だが幸い、クラスは受験ムード上昇中、ちょうど飽和状態じゃないかと思う頃だったから、そんな他人に構ってられる状況でもなかったのだろう。さらに幸いは重なって、三年生の三学期なんて殆どお休みのようなもの、二週間後にはセンター試験も控えているし、その後には二次試験もある、学校には来てもこなくてもどっち

どでもいいぞ、と担任も言っていた。だから、クラスメイトにばれる事は容易に回避できた。

だが自分も受験生。受験に関しては幸いがない。

センター試験の日が近づくと比例して、炬燵の上のイントロピーも増大していき、前日にはついに天板をひっくりかしてしまった。自分でも驚くほど感情的な行動で、一晚、炬燵に潜って自己嫌悪に溺れていた。そのせいだと思っけど、試験中に何度も涙が流れた。自分の不出来や後悔とあくびで。

けど、まあ、なんとかなるものですよ。ほんと。

足切りも免れ、本試験を満足できて、その夜から溜まったキットを食るように作りだして、合格発表の日を忘れるほど、のんびり、のんのんのんびり、工作尽くめでした。

一応は、世間の定番に乗ってみようかという出来心で、合格発表を見に行きました。

「おいピカちゃん、すげーよ、合格してるぞ」

どんな理由か、半屋くんと共に。

そして、僕が掲示板で受験番号を確認するよりさきに、半屋くんが合格している事を僕に教えてくれた。

「なんだよ、もつと喜べよ。わーい、とか、きゃー嬉しー、とかハレルヤとかさ」

周囲の人混みを無視して半屋が両手をバタバタと振る。コサインシータの角度を求めよ、と問題をだしている訳でも手旗信号の模範演技をしている訳ではない。

「喜んでるよ。それ以上に……、半屋が憎い」

「うわ。服もダークだが、今日は一段と暗黒面をさらけ出してるね、お嬢さん。せっかく第一志望の大学に受かったっていうのによ」

「しかたないだろ寝起きなんだから。寝起き四時間は機嫌が悪いの、しかも徹夜でNゲージ作って、早朝誰かに誘拐されて怒らない奴なんて駄犬ぐらいだ。……くそ」

第一志望の大学には受かったようだ。僕は夢を持って立っているような状態で、現実味がなく喜びも塩分1%ほど。必要書類は受け取ったらしく、アパートに戻り二度寝をし夜に起きたら、炬燵の上にそれがあつた。ついでに、得体ののしれない段ボールが玄関口に放置されていたのに気付いたのは、翌日の事だった。

四月から大学生活が始まる。

区切りだ。

同級生の多くは新しい刺激と著しい変容を求めている。

僕は、うやむやの内に高校生活を終えた。

粘性の高い切り口から伸びる糸は、後悔と残り物で出来ていた。

それを綺麗に断ち切るための四月。

焼き付けられた春。

僕は、変わらない事を願う。捨てない事を望む。

持ち過ぎない事を心掛ける。

もつと高く飛ぶことよりも

うまく水平飛行できるように、

もつと、綺麗に墜ちられるように、

素敵な独りになれるために。

そして、たまに藍色の空の月に、出逢えますように。

6

がっちり構えて、どつからでもかかってこいの意気込みで四月を迎えた。過ぎてみれば、すごく疲れた。肩すかし、といえば笑えるが、実際ももつと惨めだった。

僕は、大学に入っても劇的な変化もなければ、衝撃的な出来事も、運命的な詐欺にも出逢わなかった。それが幸いか不幸か贅沢かは決めないけど、静かなのはありがたい。

大学のシステム、組織的な構造ではなくて授業などの受講方法やその他諸々の手続きにも五月を過ぎて、ようやく慣れた。そして思った、大学生って結構優雅やん。何がいつって時間の制約が殆どないのが嬉しい。ちゃんと単位をとって、直ぐにアパートに戻って工作三昧。実に素敵だ。もちろん学費のためにバイトをちよくちよくやるが、それでも中学時代と比較すれば月面サーカスだ。深く考えてはいけな。そんなサーカスな日々を満喫していた七月。

バイトも課題もない頭踊るような土曜日。アパートの自室で、ちようどエンジン模型に浮気していた頃。チャイムは元々ついていないが、ノックすらもなく、半屋くんが押し入ってきた。無言で、どたばたとこの部屋が一階だからよかったものの二階以上だったら下の階から苦情が出るぐらいの足音を立てて、部屋の中央までやってきた。そして、そのまま黙って電源が切れている炬燵にはいった。

僕の向かいに座り、半屋くんは僕をじっと見た。じーっとなんかという擬音が聞こえてきそうなくらい静けさの中、僕を見た。僕は警戒して、デザインナイフとプラスチックライバを手を取った。

「ピカちゃん……今、女だよな」

しばらくして半屋くんが呟いた。真面目が顔で。

今更そんな事を訊く半屋に、僕は燃焼用アルコールとライター的位置を目で確認した。

「ピカちゃん、おまえを女とみこんで頼みがある」

「は、はい？」

両手を机の上につけ、顔を近づける半屋くん。僕はその分、身体を退いた。すると半屋くんはいきなり頭頂部を見せて、こう叫んだ。

「お願いだ。オレ様の彼女になつてくれ」

「え、……………。ええ！」

時間差で僕が叫んだ。

そして勢いよくベッドに飛び逃げる。ナイフとドライバの武装。

十年以上の付き合いだ、まさか半屋にそういう趣味があるとは驚きだ。まったくもって驚きだ。恐怖だ。絶交だ。絶縁体だ。

「お、おまえ、今まで僕を騙してたな、この変態詐欺師」

「ちげーよ。落ち着け、とりあえず落ち着け、落ち着け第一。そしてその両手の武器を捨てて、速やかにオレ様の説明を聞きなさい」

「よ、よし。言い訳なら聴いてやる、そして吊してやる」

僕は武器を放棄しなかった。だが半屋の話はちゃんと聴いた。

長々と溜息と二酸化炭素交じり喋ったが、要約すれば、明日来られる両親が付き合っている恋人を紹介しろと言われた、との事だった。

「紹介すればいいじゃん、減るもんじゃなし」

僕は武装解除し、国交正常化のかわりにコップに緑茶を注いで半屋に渡した。

「減るから困ってるんだ、仕送りが。ピカちゃん、うちの親って覚えてる？」

「うーん、小学生の頃だったからな、最後に半屋の家に遊びにいったの」

お茶を飲みながら、目を瞑って記憶を辿る。

「なんていうか、厳格なお父様とお母様って感じだったな」

「そう、そうなんだよ。親父は特に厳しい。いつも眉間に皺寄せて無言でメンチきるから怖いのよ」

「確か、お医者さんだったけ」

「そう。真面目な外科医。あまりにも真面目だから、オレ様は、親父の暗黒面を強く遺伝されているのさ」

服装でその人の人となりと判断するのは軽率だと思うが、半屋の親父さんはピシッとしたスーツを着こなす真面目さと紳士的な人だが、半屋自身は、よれよれの特効服のような白いジャージに年中サンダルで顔面装飾（最近、頭髮がオレンジになった）という、似てもにつかない親子。

「それで、どうしたの」

「だから、両親がこっちに来て、ついでに恋人も紹介しろってんだよ」

「紹介したら」

「それが出来たら苦勞はしてないっの」

「なんで」

「だって……………今喧嘩中なの、マジでやばいぐらい」

横顔を見せ、弱々しくコップを持つ半屋くん。

「だから紹介したくても紹介できないし、仮に両親に合わせたら、どうなる事か……………絶対険悪な雰囲気構築される。そういう成分同士なの」

「理由はまいち納得できないけど、それで僕に、今喧嘩中の彼女に代わって、彼女代理になれっていうのだね、半屋くん」

「イエスッ。おまえなら両親の好みにも合いそうだしよ、ほら、髪も染めてないし、ピアスとかしないし、おまけに色白と来た。ちょっと良い服着て化粧すれば即席令嬢のできあがりってなもんよ」

「でも、いくらなんでもばれるだろ。会った事あるしさ」

「大丈夫。あれから何年かだし、性別違うし、絶対バレないって、だから頼む。一日で良いから、彼女役を演じてくれピカちゃん」

「拝み倒すような半屋の説得とで、僕は条件付きで一日彼女役を引き受けてしまった。」

もちろん後悔しているし、出来ればやりたくはない。だって、僕は男ですよ。女装の趣味も生憎ないし、こんな某新喜劇みたいな展開に巻き込まれたくないし、同性愛にも惹かれないから。

だがしかし、一度やると言ったからには見事に令嬢風の彼女になりつてみせなくては男が廃るといふものだ。……………はて、男が廃ると何になるのだろう？ 臆病なライオンか空の飛べない白鳥か、わからないが間違いなく女になるといふことはない。それは断言できる。だって、廃るなんてずいんと暗い色のイメージからかけ離れてるよ。その真理に気付いたのは、半屋が用意した服を試着した、夜。

ほら見て、この真っ赤なスカート。ちょっと膨らんでいるのが可愛いでしょ。それに化粧もやってみると、夢中。ネイルアートとかもついでにやってみると、工作少年の心をくすぐるっていうのかな、今まで培った塗装技術を遺憾なく発揮して発展させてみたくなるのよ。もう、鏡の前に一日中座っていたいぐらい。自分の顔をながめているだけで、楽しい。それを知ってしまった。

半年ぐらい前の僕は、なんで化粧に何時間もつかうの？ ずいぶんと時間持ちだこと、と悪い印象に偏っていたが、これは撤回して訂正して生まれ変わったような心境だ。どうしよう、いろんなアイディアが浮かんで色んな表情を作ってみたくな

った。もう部屋から出ることなく、本格的に鏡の国のアリスになろうかしら……………。だがしかし、そうは問屋が卸さない。問屋が卸さないならメーカー直販だ。そして問屋も棚卸しをしなければならぬ、だからってそれを棚上げにしないように。

日曜日の昼。僕は半屋がどこから仕入れた日く令嬢風の洋服を着て、これまたどんな顔して買ったのか分からない化粧品セットでメイクを済ませ、何処から見ても私は御嬢様よ、おほほ、と誇示しない程度の淑やかな装いで、半屋と共にポロアパー

トを出た。

そして半屋の二両親と対面。

「はじめまして、崎河ピスカと申します」

偽名を使って挨拶をした。隣では半屋くんが笑顔だ。顔面の装飾もなく、おでこの入れ墨は前髪で隠し、ちよっとフォーマルな装いで、好青年の御曹司みたい。いや、本当に御曹司なのだけどもね。

半屋のマンションの一室で、ご両親と御茶を飲みながら、楽しい談話をしたのだけど。そのマンションの家賃は、僕が住んでいるアパートの家賃の約十倍。そんな部屋に、高校生から住んでいる。

小学校からの付き合いで、高校生になるまでの半屋は、とても大人しく、淑やかな人物だった。ちよっと、悪戯好き。よく、僕に独り言のように愚痴っていた。「一本道だ。鉄格子に囲まれた一本道が用意されて、そこを歩けて、ずっと昔から命令されて、それに気付いたとき、ホント、逃げ出したくて、堪らなかつた。だってよ、右、左、右って足を動かせば良い単純に慣れて、目標も目的も全部用意された気楽さと退屈さが、怖いんだ。どんだん単純になって、目的と意味ばっかり着飾った重苦しい生き方なんて、オレは嫌だ」

それが中学三年生、夜更かしの長電話で吐き出された不満で、後は、その不満と汚れを流すように、ただ泣いていた。その頃の僕は、大切な親友のために、ただ電話越しに、静かに、涙が渦巻く音を聴いている事しか出来なかつた。静かな夜だった。いつだってそう。静かな夜は、狂ったように誰か泣かせてしまう。その泣き声を聴くのは、友だったり恋人だったり、冷たい枕なのだ。

それからがたぶん、半屋の反抗期なのだろう。高校入学とともに一人暮らしを初めて、質量か意思の問題か分からないが、F1のスタートのような加速度で、素行が悪くなった。服装や生活態度、趣味趣向、言葉遣いも、人格を変えたように。でも、それはプライベートだけで、学校や、両親の前では、中学時代からの延長線上の人格を使用しているようだ。それでも、両親には、少しずつだが反抗を試みているみたい。その一つが、僕を恋人として、両親に紹介する事のようにだ。

半屋が、僕を紹介した時のご両親は、三十秒近く啞然として立ちすくんで仕舞われていた。半屋は、飄々とそれを眺めていた。僕は、どうしようと、微笑みが苦笑いになってしまった。

だが、その動揺の空気は、三分もすれば沈殿して、いつの間にか外に出て行った。でも、僕と、おば様が紅茶とお菓子の用意していると、向かい合ってソファに座る父と子の雰囲気は、錆ついたゼンマイ仕掛けで作られてるようで、僕まで緊張してしまった。あまり馴れ馴れしくもなく、だからといって嫌悪し合っている訳でもなく、仲がいいのか悪いのか、そんな評価なんて重要じゃないと思うけど、側にずっと居たくはない。だからなのか、ご両親の話は、僕への質問や、返答を期待するよなもののばかり。半屋は、三度目の紅茶のお代わりをすると、むすっとした顔で、外で夕食を摂ろうと言った。今日は、じつに大人しい。

僕は、ただ、時間の速度を弄りたいと、願った。

それほど、今日は、楽しくない。

でも、結果だけ言えば、うまくいったと思う。ご両親とも話しは弾み(昔何度か話しをしたことがあるからだと思う)断続的な笑みもあり、ホテルの展望レストランでの会食もつつが無く終えた。なかなか好印象を得て頂いたと自負している。

「ピスカさん。今度は実家にいらしてね」別れ際、おば様に誘われたのだから、上出来だろう。

戦利品もある。半屋くんが用意した数点の服と化粧品セット、そしてさらに、夕食の時、レストランのナイフとフォークが素敵だと言ったら、おじ様がそれらのセット(もちろん新品)を店の人に用意させて、僕にプレゼントしてくれた。さすがに驚いた。

とにかく僕は、半屋くんの彼女を演じきれた。半屋にアパートまで送ってもらって、別れ際、お酒が入っているのか「さんきゅーな。愛してるぜ、ピスカちゃん」陽気な声で、最後まで恋人ごっこを彼も演じていた。途中、偽彼女なのか本当に彼女なのか、曖昧な気分になった。僕も、ひどく酩酊した気分だった。

その二日後、僕は学食で半屋くんを発見した。

ちょうど人の少ない時間帯というのもあったが、威嚇的な赤いジャケットに工事現場で三日着崩し様なジーンズで、足下はサンダルという医学生ならもうちよっと清潔にしてはいかげしょうかと助言したくなるようなファッションなので、直ぐに見つかった。

半屋くんは、変わり種のD定食を食べていた。僕が近寄っていくと、半屋くんは気付いて手を振った。僕はそのまま向かいの席に座る。

「よう、ピスカさん。ご機嫌麗しゅう候」

「それは日曜日でおわりでしょ」

「いいじゃん。なかなか可愛かったぜピカちゃん。まじキュンよ、まじキュン」

「お願いだから、あんなピエロ、もう二度とさせないで」頭痛を堪える様に手を添えて、溜息をつく。

「えー。もったいない事いうよ。まんざらでもなかつたくせに……その証拠にそれ」半屋が割り箸で僕の顔を指す。行儀悪い。そのニヤニヤした顔も気持ち悪い。

「ちやっかり化粧してんじゃん。しかもほのかに香水も。……っは、オレ様の目と鼻はごまかされないぞピカちゃん」

背もたれに寄りかかり、横柄な態度で半屋は、言う。だが味覚はカモがネギをしよつてるようなものだ。そう言おうと思ったが、今は黙っておくことにした。

「どうせだったら服もほら、こないだみたいなの、スラッとしたスカート履けばいいのに。あれ、やるって言ったじゃん」

「うん、確かに貰ったよ。でも半屋くん、もう一つ約束したよね」半屋の笑みが消えた。そして、視線をそらした。

「一日彼女やるかわりに、僕の欲しい物なんでも買ってくれるって約束。まさか忘れたわけじゃないわよね、半屋くん」

僕は、半屋くん御薦めの令嬢風微笑みを浮かべた。

約束したのだ。その約束を履行していただくために、僕は、半屋くんの身柄を拘束しに学食に足を運んだのである。半屋くんは、約束を覚えていたらしいが、まさか、冗談のつもりだったらしく、初めは渋った。だが、そこは彼との付き合いが長い僕、恫喝するネタは多々有る。え、それって脅迫じゃないかって、違いますよ、協議です。いきなり他国に爆撃するよりよっぽど平和的ですよ。

大学から半屋くんのミニで、ホームセンタへ直行。店は大きくて品ぞろいも良好、なのに人は少ないという絶好センタ。

僕は、店内を見渡ししながら、でも、目当ての売り場に半屋くんを引き連れ歩いた。陽気な音が流れる店内。親子ずれもいれば、プロの方らしき人や日曜大工の材料をお求めの方もいる。

まずは機械用具を買って貰おう。棚に陳列されている小型機から、床に箱入れされたままの大型品まで、一つも漏らすことなく凝視して回る。念のため、再三逃げ出そうとした半屋くんの片腕を掴んで品定め。あまり時間をかけるのも悪いと思っ

て、僕は小さな双頭グラインダーをカートに乗せた。

「まさか……女の子にこんな敵ついものプレゼントするとはな……」

げんなりした顔で溜息をつく半屋くん。

「貴重な経験でしょ」

僕は気分が高揚しているようだ。声が高い。

「なんだってこんなもん……どうせだったらさ、指輪とかアクセサリーとか、洋服とか、そういうの買わないか。もしくはバッグとかよ」

どうやら半屋くんは、今までそういった品々を女性にプレゼント、もとい貢いできたようである。だけど僕はそういった物には興味はない、とまでは言い切らないけど、グラインダーやボール盤に比べたら見向きもしない。

「せっかく女の子してるんだから、そういう嗜好も楽しめよ。どっぷり浸かるかもしれないぞ、その化粧みたいに」

「それは関係ないよ。あのね、半屋くん。性別が、個人の趣味嗜好を支配している訳ではない。男が女になろうが、女が男になろうが、好きなものは好きだし、やらなくちゃいけないものは沢山作れる。それが理由になるようなものなんて、本人の思想が支配的なんのさ」

「……支配的って、どういう意味？」

「え、あ、うんとね……、主要因というか恣意というか……」

「つまり束縛されてることとか」

「まあ、それでも良いと思うよ」

「なるほどね。だったらオレ様、束縛されるのだけは大大嫌い。そういう男女関係は絶対続かない」

「ああ、それ。そういう思いこみを、支配的っていうの」

グラインダーと工具数点にLEDを数個、スプレーと接着剤を数種類、カートに入れる。

余は満足じゃ、の気分だがついにと木材や鉄板も買って貰おうとカートを押して移動。半屋くんの表情は、居直ったのか、緩んだ微笑みを浮かべていた。そして、用途と関連性が希薄な商品を、一緒に籠に入れていく。既に四万円ぐらいの物がカートに積まれているが、僕が大丈夫？ と訊くと、店ごと買ったるか、と半屋が答えた。だから、この機会に、溶接工作にチャレンジしようと思っ、もう一度、工作機コーナーに戻ろうと、カートを押し出すと、

「ん、ぬぬ……」半屋くんが突然立ち止まり、一点を凝視しだした。

僕は、その視線を辿って見た。女性がいる。その女性を、半屋は見つめている様子だ。しばらくして半屋は、無言でその女性のもとへ歩き出した。僕は置いてけぼり。そして、女性に話しかけた。女性は驚いて、すぐに笑みを浮かべた、半屋も楽しげな表情だ。知り合いなのだろう、と僕は邪魔をしないよう一人で買物物を続けようと思っ。すると、半屋は女性と共に戻ってきた。ペこりと、とりあえず会釈した。「ひさしぶり」と女性が、上手な笑顔で言った。

あれ、初対面ではないのか。僕は、女性の顔を記憶の中から探したが、該当者はおりません。……困ったな。この方は、僕をご存じで、以前にもお会いした事があると推測されるのだが、どちら様でしょう、なんて訊くのは失礼だろう。困った。「もしかして……わたしのこと覚えてない？」

軽く首を傾げ、悲しそうというより、悪戯っぽい表情で女性が訊く。

「え、と……そんな、こと……」なんとか誤魔化そうか時間を稼ごうとする。

僕は、もう一度女性の全体像を見た。骨格といい、顔といい、雰囲気といい、どことなく誰かに似ている、既視感はある。なのに、それが誰なのか、固有名詞が浮かんでこないもともと文章で思考したり、覚えたりするのは苦手だから、固有名詞は浮かばないのは諦めていたが、映像も中々浮かばないのは珍しい。なぜだろう。「中学卒業してからだから、覚えてないのも無理ないね」女性は微笑んだ。

同時にヒントも口にした。中学卒業、ということは中学時代の友人知人か。それならだいたい絞り込めるぞ。なにせ生徒数は少なかつたから。となると、もしかやという数名が浮かぶ……骨格を読み込み……顔つきを鑑定……成長を推測し……仮定……サンプルをならべ……現在の表情を偽装……記憶を三次元へ投影……照合……そして、赤面。

「あ、もしかして……朝霧さん……」

彼女は、にこり微笑み頷いた。半屋が、下品に嗤う。僕は、背中に寒気と震源不

明の揺れを感じていた。

衝撃的ではない。

運命ではない。

劇的でもない。

ただ、恥ずかしさの震えで、熱せられて中学時代の映像が回り始める。

カラカラと、音を立ててフィルムが回る。

抽象的に抽出された映像が、削られながら回転する。

色褪せては塗り替えられて、削られては流された。

古さが展開して、組み立てられて、こんには。

こんには、思い出された夏。

誰かの恣意的な再開に、僕は、ゆっくり手を胸に当てた。

鼓動しているだろう心臓、これもきつと誰かの思惑のままに。

気付かれてはいけない。

だってそれは、もう開かないと、どこかに捨てたと信じていた、思い出なのだから。

思い出を開く鍵は……、なんだ、ここにあったのか……。

7

きつとミステリイファンよりメジャーで、鉄道ファンよりマイナーだと思う。

中学時代、好きな女の子にドキドキの告白。誰もが経験しているようでは、本当に宇宙人はいるのですか、なんて訊く人は絶えないだろう。僕は。そんな事を質問しません。だけど、告白しました。

あれは初恋なのか、恋の定義も知らない僕には分からないだけ、初恋と呼んだけれうが、希少価値が付くと信じてみたくなるという訳ではないが、便宜上、それを初恋と呼んでみよう。

朝霧さんは二、三年生の時のクラスメイトで、一緒に学級委員を勤めていた。だからと言って、特別親しかった事はなく、友達と呼ぶのも戸惑うてしまうぐらいでも、僕は彼女が好きだった。思春期特有の暴走と迷走を含む好意を、彼女に抱いていました。それで何度か、自己嫌悪に飛び込んだこともありましたが、だつてね、声をかけられても無愛想に返事してしまったり、会話をしても続かないような事を言ってしまったたり、運動会のフォークダンスでは定番に乗るように、貴方が嫌いなのですよ、みたいな態度を取ってしまったりと、頭の中で思い描く、明朗快活で素直な理想の僕とは違って、彼女のの前では、目を合わせることも出来ない臆病な無愛想小僧だった。きつと嫌われているだろうかと、僕は、と思ったが、当たって

碎けてサイボーグ化の気持ちで、彼女に告白した。どこまで臆病なのだと思うけど、もし惨めな断れ方したら登校拒否になってしまおうと予測して、卒業式後、学校に来ていた彼女を呼び出して告白した。

僕は、彼女に、付き合ってくださいという旨を告白した。

どんな言葉で言ったか、覚えてない。事前に言おうとした事は覚えている。血糖値が上がりそうな言葉を言おうとしていた。幸い、事前に考えていた事の一割も糖分はなかった。それが原因ではないのは、明らかだ。

僕は、遠回しに、貴方とは付き合えませんという旨を告げられた。

その時、きつと、僕は彼女の前で、初めて笑ったと思う。

音の無い笑み。何かが解けたような、吐息。霜が降りたような思考。その瞬間から、彼女がとても、遠く感じた。そして、その記憶を、セキュリティ万全な忘却封印に預けてしまった。鍵は、きつと、遠いと感じた彼女に預けたのだろう。

あれから何年々

タイトルも思い出せない歌が頭の中で再生する。

あれから約四年です。

僕は、彼女を中々思い出せなかったが、あの告白の錆びた映像は直ぐに思い出せた。

彼女は、僕を滑らかに思い出せたようだ、だがあの告白の事はこれまた滑らかに風化して、目に見えない塵となっているようだ。

でなきゃ、ホームセンタを出て近くの静かな喫茶店で、一時間近くも軽快に談笑なんて、出来ないでしょう。

僕は、ずっとパフェを食べていた。僕に、何度か話しを振られたが、無愛想に会話を中断するような返事しか出来なかった。成長してない。それを痛感した息苦しい一日になってしまった。

朝の鋭い陽射しが、頭蓋に突き刺さるよう。

陽炎の様な記憶を整理整頓させて、夏期休講前の大学へ向かう。

そして二時限目の力学の講義で、朝霧さんと会った。

彼女は、僕と半屋くん同様この大学の学生で、しかも僕と同じ学部だと。講義中に知った。隣の席だったから、僕はろくに講義の内容も覚えられないほど、どきどきだった。平静を装って、ペンをかりかりしていたが、我ながら下手演技だと後で反省。そして、気付いて、驚いた。

僕は、まだ彼女の事が好きだ。

中学時代とは変わらず、朝霧さんが好きです。

中学時代と違って、透明な滑らかさの好意を抱いている。

蒸気エンジンと電動モーターの違いに近い。

彼女とは、その後も何度か講義で一緒になった。講義以外でも何度も会い、話しもした。頭で描くスマートな僕と現実には彼女の前にいるどうしようもない僕との差は、徐々に縮まっていく。僕は、微笑み方を覚えた。毎日、鏡の前で、彼女の真似をして微笑んだ、口紅を塗る真似をして彼女に近づくように。鏡の前の僕は、中学生の僕であったり、一九歳の僕もいたり、朝霧さんになった僕でもあった。近づいてみたい、色々なものに、ただ……そんな動機で鏡の前に座っていたのかも知らない。

点滅する六十。繰り返される二十四。振り繋がる七。捲り捲って十二。

不揃いの数字が仲良く告げる毎日。十進法を嫌うような並びはどこか、キザな奴等だと思ふ。平行四辺形を習った時にも思った。台形は頑固そうで、直角三角形はインテリジェンス、円錐は繊細な風合いで、三角錐は孤高の存在、正八胞体は宇宙進化と錆びた帽子。けれどすべては回転体なのです。

夏期休講中の大学に三度足を運んだ。

それ以外は部屋に籠もって、薄い布に換わった炬燵で工作をしていた。これは毎年の事、けれど例年とは違い事も当然あった。

昼に映画を観たり、流行の店に買いたいものに出たり、花火を観に行ったり、海に行ったり……。一人だったら、そんな事しないのに……。朝霧さんと一緒だからだったと思う。デート、という訳じゃない……。

だけど、中学生だった僕と比べたら、素晴らしい成長だ。ただ、残念なことは、毎晩のように半屋くんがアパートにやってくるということです。

「ピカちゃん、最近、調子乗ってないか」

口を斜めにして半屋くんはビールを飲んだ。

「どういう意味？」

僕は、課題のレポートを書きながら訊いた。

「まだ朝霧の事、好きやろ」

「うん。好きだけど、なに」

僕は、半屋くんを見ずに、答えた。かりかり。

「かー、マジかい」中身が殆どなくなった缶が炬燵の上に置かれた。

「うわ、信じられんのー」声からしてあまり機嫌が良いようではない。苛立ちも感じる。だが僕は、無視してレポートを、かりかり書く。清書。

「ピカちゃん、もしかして、それは恋ですか？」バカにしたような、緩い声。

僕は、顔をあげ、背筋を伸ばして横を向いた。威嚇するように、半屋くんが顔を近づけてくる。すでに缶ビール三つ飲んでるが、酔っぱらっている兆しは見えない。

「……いけない？」

僕は、半屋を見た。少し視界を傾けて見た。

半屋が、僕を見る。真剣な表情で僕を見る。睨んでいるつもりなのかもしれない。威嚇なのかもしれない。

「おまえ、女なんだぞ」半屋が冷たく言う。

僕は、瞬きをして、半屋を睨んだ。慣れない目つきで、半屋を睨んだ。

「僕は、男だよ」

「だが、オマエの身体は男じゃない」

「……そんなの、関係ない」

「気持ち男だからか？」

「そうだよ」

「でも、心の変化も、身体の変化も、どちらも相互要因だ。互いに影響してるし、干渉してる。支配的だろ」

「だから、それが何だって言うんだよ」

僕は、ペンを離して、身体を半屋に向けてまっすぐ彼を見た。

半屋は、腕を組んで僕を睨む。

「崎河ヒカルは、女だ」半屋は、そう断言した。

「おまえが、どれだけ否定しても女には変わりない。そして、オマエもそれを認識している。なのに、騙そうとしているだろ」

「なんで僕が、騙さなきゃいけないんだ、僕自身を」

「もちろん、利己的な思惑があるからだろ。……男として、朝霧が好きなんだろ。そして、女の朝霧に、男として好かれたい。……違うか？」

僕は、頷いた。僕には同性愛の嗜好はない。だから僕は男で、朝霧さんは女。その関係で、僕は彼女が好きだ。一般的に正常と言われている異性愛。

「朝霧は、おまえを男として認識している。たぶん、気付きちゃいない。おまえはその辺りは上手くやってるもんな。オレ以外、きっと誰もオマエが、男から女になつたなんて気付いちゃいないさ。……朝霧とは縁を切れ」

半屋が、僕の大切なものを投げ捨てるように、言った。最後の言葉を理解するのに、数秒掛かった。

イマ ナンテ イッタ？

部分再生。傲慢な声で、半屋は何かを言った。

「もう一度言う。朝霧とこれ以上逢うな」

半屋は、一言一言口を大きく動かして、ハッキリとした発音で、叫ぶようにそんな事を言った。

「なんで……、半屋が そんなこと言うだよ」

上手く口が動かない。

「阿呆か、おまえ」

僕は、半屋の胸ぐらを掴んだ。揺らす。睨む。押し押せる罵倒を視線に変換して、

睨らんだ。

半屋が、僕の腕を掴む。大きな手。暖かい。強く、締め付け、僕の腕を払った。「ダチだから、それで十分関係してるだろ！」

半屋は立ち上がった。鋭く冷たい眼差しを、僕に下ろす。そして、そのまま黙って玄關まで歩いた。玄關口に手を掛け、振り返って、僕を見た。

「もう中学生でもないし、男でもないんだ。誰だって成長しるし、変わっていく、いつまでも子供でいらねえんだよ。どんだん単純になっちゃう。……でも、おまえは、ちょっと特別な変化していたから、心配なんだよ。これから先、ピカちゃんが、その周りがどうなるか、考えても、考えても、わかんねえからすげえイライラすんだよ！……だってさ、ピカちゃんが女になったの……オレのせいだから」

半屋は部屋を出て行った。残された言葉が墜ちる前に。

静寂は外から侵入してくる。

僕は、空になった缶をドアに投げつけた。

言い返す相手がいない。

投げられた缶は、それが運命だったかのように、静かに転がった。

静かな夜だ。

なのに僕の内側は、無秩序に軋んで、格好わるいほど泣き喚いている。それを際立たせる、低い月が覗く静かな夜には決まって、僕を静かに寝かせてはくれない。子守唄を歌うのは、友だったり恋人だったり冷たい枕ではなく、白々しい朝陽なのだ。

8

騒がしく遊び疲れた子供達は、そっと優しい夕日に手招きされるように帰って行く。大きく膨らんで、五月蠅い程に彩られた風船が、じわじわと萎んでいく静けさは、微笑ましくもあるが、見窄らしさが鮮烈。

昼間は木下に隠れていた闇。公園で遊ぶ子供達を闇の中からのぞき込んでいた小さな子は、光がお家に帰ると、闇を辿って、砂場でトンネルと作っている。ここは彼しかならない。彼は、一人でトンネルを掘っていた。山を作って穴を開ける。できあがったら、崩して、また山を作ってトンネルを掘る。鈍角から滑り落ちる砂と闇トンネルの中にひっそり隠れる臆病な闇を、少年はそっと邪魔をしないように穴を掘る。誰も少年に声を掛けない、注意をする大人も、訝しむ学識経験者もおらず、蔑む綺麗好きな水もない。同じ事を繰り返していた。無駄な事かもしれない。固めては崩して、穴を掘っては埋めていく、冷たい砂に熱を奪われ、けど、その瞬間は喜びもあるかもしれない、そして、穢れない。それは、生命の営みに近い。けど

少年はその価値に興味はなく、砂を肩まで乗せてただトンネルを掘っていた。

夏の騒がしさは、枯渇していくように萎んでいく。

あちらこちらに、孤独は座っている。

その孤独に触れると、夏の余熱で、汚れた手を温めてくれる。

とても気さくな孤独。

そんな孤独に、僕は、秋の水曜日に出逢った。

祭り上げられた、群れなす秋。

木枯らしと散歩する、独りぼっちの秋。

僕は片手を振って、電柱によりそう孤独な影に挨拶する。影は揺れた。礼儀正しい影は好きだ。

デジカメを取り出して、写真とつてもいいかな、と訊くと影は揺れた。僕はシャッターを切る。そして手を振って長い上り坂を登る。

夏期休講も終わって、試験や学際などのイベントも騒がしく終わって、木枯らしがそれらの掃除をして、静けさと余熱がキャンパスに流れていた。

「あ、ヒカル」

誰かに呼ばれた。声のした方へ振り向くより先に、朝霧さんの声だと分かった。だから僕は、彼女と視線が合ったとき、既に微笑んでいた。嬉しかったからだ。ただ、憶測する程度の不明瞭な理由で、嬉しくて微笑んだ。

僕は、片手を顔まで上げた。

彼女は、小走りで近づいてきた。手には小さなバッグが握られている。ノートや参考書より小さい、せいぜい魔法瓶ぐらいしか入らないのではないかと考える小さな淡い青色のバッグ。長い髪と長いスカートが煙のように揺れる。

いつかだろうか、彼女は、僕をヒカルと呼ぶようになった。中学時代はずっと『崎河君』だったのに、少しくすぐったい感じだが、心地いい声なのは変わりない。

「ひさしぶり、元気」彼女は、僕の変化を見落とさない気なのか、大きく目を見開いて言った。

だが二日前に会っている。

「いつと比べて？」

彼女は、唇を尖らせた。

「講義？ それとも暇つぶし？」

「暇つぶしに講義に出たら、どうなるの？」僕は、おどけた声で言った。

彼女は、目を大きくして、直ぐに口を斜めにした。

「朝霧は？」僕は、いつからか敬称を省いて彼女を呼んでいた。それが運命だったかのように、気付かないうちに。気付いた時は、少し怖かった。

「私は、今から帰るところ。でも、暇つぶしにヒカルと遊んであげてもいいわよ」目を細め、すましたような顔で、朝霧さんは口の端をつりあげた。

さっきの反撃のつもりらしい。  
その攻撃はとてもセクシイだ。  
僕は見事に撃沈された。応用数学の講義は直ぐに予定から削除。  
僕は近くの喫茶店に向う。

これで何度目か分からないが、朝霧さんと大学で会って、一緒にどこかへ行くというのが頻繁になってきた、その時間も当然増えていく。でも、彼女は気付いていないだろう。気付かないふりを演じ続けている、女優さんなのかもしれない。そう思えるのは、彼女と別れて後。彼女と一緒にいるときは、僕も平凡な舞台の上に立って男の僕を演じている。彼女と会っている僕は、思い描いた通りの僕に近づいている。そして部屋に戻って、鏡の前に座っている僕は、たぶん、彼女に近づいているのだと思う。

半屋とは会っていない。

夏期休講前から、会っていない。キャンパスで偶に見かけるけど、僕は無視していた。とても息苦しい。半屋を見つけて、声を掛けようとして想い止めるたびに茨が巻き付いてくるように息苦しかった。なんでだろう、なんでこんな思いをしないといけないのと時々思う。けど、茨は増えていく。

「ごめんなさい……」朝霧さんが、突然謝った。

「え、……なにが？」僕は、戸惑った。

彼女の視線は床に伏せられ、両手で、コーヒーが入ったコップを大事そうに包むように持っていた。

「私、ヒカルに酷いことしたでしょ……」

彼女は、視線を動かさない。

僕は、コーヒーを飲んだ。濃度の薄い、鋭い苦みのコーヒー。

朝霧さんは、ゆっくり視線を僕に向けた。

僕は、姿勢を正し、椅子に座り直した。

密度の低いジャズが流れていた。

「中学の卒業式の後の事……」

彼女の表情が、硝子のように曲げれば簡単に割れそうなほど脆く感じた。

「ああ……あれね」僕は、もう一口コーヒーを口に含んで、コップをコースターに置いた。ちょっと驚いた。今更そんな話しをされるとは想定外な事だったから。

僕は、彼女と再会してまずその告白を思い出した。それから何度も彼女と会って話しをしたが、その事は今まで一度も話題にならなかった。てっきり彼女は、忘れてしまっていたのかと思った。もしかすると、あえて避けていたのかも知れない、だが、それなら、なぜ今、それを話すのだろうか。僕は、黙って彼女を見た。

「わたしね、本当は嬉しかったの」

「僕はドキドキだった」でも幸せだったかも……。

僕は、目を閉じた。

二秒。

心臓の鼓動が加速したのを感じた。

「わたし、ヒカルのこと好きだから、嬉しかった」

噛み合わない歯車のように、彼女の口調は、ぎこちなかった。

「でも、どうしてかな……私も、好きですって言えばよかったのに、言えなかったのよ」

彼女は、微笑んだ。

僕の脳裏で、中学生だった彼女の姿が浮かぶ。

「だから……僕はふられた、わけだね」

僕は、淑やかにしよう意識して言った。

彼女は、ごめんなさい、と言う。

僕は、コップを持った。彼女もコップを持った。そしてコーヒーを飲んだ。拗ねたように冷めたコーヒー。

「でも、なんだってそんな話しをしたの？もしかして、僕が今でも傷ついていると思っただけ？」

「うん……そうでない事を願っていた……」

「ああ、だったらその願いは通じたね。僕ってそんなに粘性高くないよ、非粘性体質っていうかお気軽な奴だから、だってまだ十九才だからね」

氣質と年齢はあまり関係ないと思ったが、僕は意図して明るい口調でそう言った朝霧さんは、僕をみて微笑んだ。それだけでも演技したかいがある。

店の硝子戸が開かれ、ベルがなった。

静かな店内では、白髪のマスタがコーヒーを煎れている。その後ろの棚には沢山の小さな缶がある。きつとコーヒー豆が入っているのだろう。その容器がちよっと可愛くて、後で空き缶を譲ってもらえないか訊こうと思った。

摩擦抵抗の低そうなクラシックが流れている。聞き覚えがあった。中学校の社会科の時間に、このテーマ曲の映画を観たから。もちろん、朝霧さんも観たはず。だから彼女は、それに気付いているようすはない。細いヴァイオリンの旋律が悲しく魅力的で、紡がれる物語の過酷さと届け先不明の憤りを拾ってくれる優しい音楽。

死ぬ順番が書かれたリストは一人の男の手に。彼は、多くの人の命を捨てる事も出来れば、捨てる事もでき、殺す事もできる。間接的に多くの人を殺した、殆どは、尊厳を剥奪されて殺された。どんなに慈愛を捧げても、彼は、間接的に虐殺した。白黒の映画が、さらに減色されていくような枯渇感を、僕は思っている。だから、この曲を聴くと、僕も何か大切だったモノを拾い忘れていたのではないかと、思い返す。

「ときどき夢を見るの」

彼女が両肘を机につけ、手を組み、そこに顎を乗せた。僕に顔を近づける。

「中学生だったころの夢をみるの。今のわたしは、突然中学生の私に戻って、学校に行つて、だけどクラスメイトはね、高校の友達もいるの、そしてヒカルが私の側にいて、一緒にクラス委員やつてるの……すっごい偉そうなの、夢の中のヒカル」

彼女は目をほそめ、意地悪そうな笑みを浮かべる。

僕は、どんな顔をすればいいのかわからなく、視線を逸らしてコーヒーを飲んだ。もう殆ど残っていないのに、長いこと口をつけた。

「決まつてね、ヒカルが私に告白してくれた場面が目覚めるの。……今も、とても楽しいし満足してるのに、なんでかな……、わたし、なにかやり残してる事でもあるのかしら」

彼女は静かに両手を広げ、それを見つめて、顔を覆った。細い息が漏れる音を聞いた。

僕は、黙って窓から空をみた。油絵の具で塗られたような灰色の空に、僕はベランダに置いてある塗装中の尾翼が気になった。

店から出ると雨が降っていた。  
密度の高い水滴が、地面に弾けてズボンの裾を濡らす。近くのコンビニで、僕は傘を二つ買って、一つを彼女に渡した。待ちわびたように、ビニル傘はねっとりとして開いて雨と喧嘩し始める。

「一つでよかったのに」

「なんで？」

「並んで歩けないでしょ」  
傘と傘がぶつからないように、少し離れて歩く。でも、手を繋いでだつて歩ける距離だ。

「それに私、相合い傘って一度してみたかったの」

僕は、腕を下ろして傘を閉じた。傘を持つ彼女の手を握って、少し挙げた。

「願いは叶ったね」  
彼女の目が大きく開く。優しく微笑んで、彼女は肩を持ち上げて、シャボン玉のような息を漏らした。

呆れているのだろうか、と思った。  
彼女は、傘から手を離れた。僕はもう少し腕を挙げた。

自分でも驚くほど、積極的だと思つた。衝動的な僕は、でも、ちよつとキザっぽい。

「これ、秘密なんだけど。わたし、今まで願つて叶わなかった事ってないんだ」  
「へえ、……凄いな」  
「でもね……そんなの当たり前なの。願つて、考えて、画策して行動すれば、

大抵の夢は叶うものなの。それでも叶わないのは、願っているだけか、他のものを失いたくないだけなのよ」

「うん、そうかもしれないね。……朝霧は、努力家なんだね」

僕は、彼女を見た。  
ビニルに弾ける雨音とアスファルトに寝そべる雨音の協奏曲に、僕は喫茶店で聴いたクラシックを頭の中で再生させた。その調子に外れて雨音は、彼女の吐息を掻き消して、何か呟いた声さえ遮る。

感じの悪い雨だ。いや、もしかしたら感じ方が悪いのかも……。  
周波数を合わせるダイヤルは無い。そんなダイヤルがついているラジオは最近売られてないだろう。大学の粗大ゴミ置き場には時々貴重な骨董品が墜ちている。その中にならあるかもしれない。以前、僕はそこで天秤を拾った。建築科の土森先生

が良いものを拾ったねと、残念そうに僕に言った。天秤って、荘厳で哲学者みたいなんだよね。どこへ持つて行つても、どちらが重いかわかりきりしている。月にいっても質量は変わらないのだ、と教えてくれる。優劣や価値を計らないってあたりが格好いい。

曖昧なものを比べて、優劣、損得の取捨択一なんて、とても不自由だ。そうしてどちらか一つを捨てて、矛盾を排除して、シンプルになったのが、大人なのだろう。

矛盾があつたつて構わない、行こうか逃げようか悩める複雑さを抱え、答えなんに要らないと、僕は、ずっと独りで飛び続けた。くるくると、墮ちるまで。

孤独は好き。寂しさはとも甘く、熟した幸せ。独りだったら、性別も年齢も貧富もクローズド、秘密は秘密のまま、朽ちていく。なのに、僕が孤独を感じるの

は、雲の隣で、水平線の錯角でも、人類最後の運命でもなくて、決まつて、隣に誰かがいる時なのだ。

となりに、朝霧さんがいる。

なぜか僕の後ろに、半屋がいてるような気がした。

誰もいない。

僕達は、静かな並木通りを歩いている。

すれ違う人も、車も、硬質な思想もない。

友情もない。

愛情もない。  
望みも、きつとない。  
悲しみが隠れ、愛想が満ちる。  
だけど、やっぱり魔法はない。  
朝霧が、突然止まった。  
僕も立ち止まり、半歩戻つて、彼女の頭上に傘を移動する。彼女の前に回る。  
彼女は、どこかを真っ直ぐ見ているようだ。その視線を辿つて一瞥する。  
灰色の空と、灰色の滑走路の様な道しかない。

僕は、彼女の顔の全体を視界に収まるまで下がった。肩と背中に水滴が触れる。少し、彼女の顔を覗き込むように顔を近づけた。撫でたような化粧と人工的な香り。こんなに間近で彼女の顔を見たことがあっただろうか。左の目尻にホクロが二つあるのに、気付いた。

「……好き？」彼女は囁いた。

無粋な雨がその声を奪おうとする。

背伸びするように顎をあげ、上目遣いで僕をみる。

僕の、呼吸が一瞬止まった。そして細く息を吐いて、ゆっくり吸う。

「好き、ですか……」彼女は、もう一度言った。

「主語は？」僕は、訊いた。

彼女は顔を閉じて、一度顔を伏せた。

僕は後悔した。ごめん、と言おうとして僕は口を少し開く、その前に、傘が落ちた。

彼女の手が、僕の手を握り、腕を掴んで、それを手がかりに彼女自身の躰が、僕の方へ寄せてきた。そのまま僕の口に、彼女は唇をつけた。

血が、痺れた……。

雲と別れた水滴が、空の底に落ちる。

彼女の響きが離れて、視界に、彼女の顔の全体が収まる。

僕は、なにも言えなかった。

彼女は目を細め、ゆっくり呼吸して、僕を見た。

「ヒカルが、好き」

声。

雨音。

交互に頭の中で、響いて交わる。

鋭い音楽が、背中を寒くさせる。

茨が、頬に食い込む錯覚。

重い水に、足がすくむ。

捨てるか放置するかのリストが、脳裏に浮かぶ。

ドキドキより速いリズムで、暴走する血潮。

眩暈がした。

五年分の雨に朦朧となる。

愛情か友情、それとも暇つぶし？

胸が熱く、唇が冷たく……。

粘性の高い灰色の空と落ち葉。

鎖がすれる音がした。

僕の後ろに、

半屋がいる気がした。

たぶん、

僕が、そう願ったのかもしれない……。

9

酸素が薄い……。

呼吸しているか分からない。もともと呼吸しよう意識しなくて、たぶん、呼吸していたのに。

眠い……。

どれだけ眠ったのか、どれだけ起きているか分からない。底が寛容なぐらい、僕はゆっくり沈んで眠気が縛る。眠りは死に近い。目を閉じて眠ってしまえば、なぜか朝になれば起きるのだと安心して、意識を睡魔に預けてします。そんな契約も保証もどこにもないのに……。目が覚めれば、また同じ場所にいるとは限らない、自分が自分である確証もない、時間は一瞥もせず行進していく。タイムマシン。寝返りをうって仰向けになる。

水飴のようにゆったり重い挙動。

炬燵の上の、作りかけの機関車が僕を睨む。その隣の勤勉なロボット時計も、僕にお腹を見せる。Vサインを見せている訳ではない。

シートにくるまる。どこからか風が入ってきた。冷たい粘っこい鉄のような風。素肌に擦れる布、それでも寒い。身を丸め、表面積を小さくする。寒さに喘ぐ唇が、かさついている。

僕は、目を閉じた。一切闇。

古いフィルムが頭の中で回る。

いい加減に、油を注さないと壊れてしまいそうな投影機が、不揃いの画像を映す。一コマ一コマの間に意識が途切れる。生の不連続性を忘れて、僕は眠ろう眠ろうと願った。ずっと……、知らない時間と場所で、僕じゃない自分で目が覚める、そんな眠りを願う。

そっと、息を吐く。

ああ、もうすぐ冬……。

やりたいことは沢山あるのに……とても眠たい。

飛行機を飛ばしたい。

原色べったりの、フラットボディの貨物車を完成させたい。

きっと生きている間には作れないほどの、キットの山。

広い庭に駅の様なガレージで一日中工作。庭園鉄道も夏は休業して、ヨットを作  
って小さな池に浮かべて……。

レポートはお早めに。

山に籠もって一人ぼっちで、ああ、家族は器用なビーグル犬。  
ペットは飼えません。

未来計画は多岐に、多次元に分布された夢に繋がっています。  
過去に夢を置いてきていませんか。

過去には時間はありません。もう、未来にしか、時間と夢は残されていません。  
夢は夢のまま、リビングに飾るのもいいでしょう。

夢を叶えるために行動している時が、とても楽しいのです。夢が叶う、その一時  
の情熱と狂喜より。そして夢が叶ったら、時間はもう戻ってきません。それがきつ  
と代償なのですね。

夢が舞い上がる。

見放された夢の欠片が空へ舞い上がる。

目に見えない。誰も見てくれない、

小さな、大きかった夢。

その夢の破片にも光りは注がれる。

不平等に、一つもこぼすことなく、反射されて、空は青く澄んでいく。

濃淡と甘みがきつと夢の個性。

そこには空しかない。

境界線を引きたがる測量士もいない。

天秤もなかった。

なにもかもが曖昧なのね……。

っう！

乾燥した乱暴な音が鼓膜を襲う。

「う、うう、む……」

二秒。薄い玄関戸を叩く音、そう思った。

シートから顔だけだして玄関戸の磨り硝子を見ると人影がある。遠慮無く礼儀も  
なくずつとドアを叩く。僕は、ベッドから出るつもりはなかった。だから、そいつ  
が諦めて帰るまでこの騒音を堪えることにした。

シートを被り直す。途端、ドアを叩く音が聞こえなくなった。

諦めて帰ったのだから、僕は溜息をついた。

十秒。

夢の続きを描きながら、目を閉じた。

現実と幻想が入り交じった、夢の国の入り口へ。

がちやり、

その音に、僕は目を開けた。

薄暗い。

誰かが部屋に入ってきた。

足音。

一定の音程。

一人……？

近づいてくる。大きくなる足音。誰だろ、思った時には足音は消えていた。  
呼吸を抑える。僕以外の息づかいが聞こえる。

何か金属がこすれる音も微かに……。

心配がする。

シート越しに誰かの温もりが伝わる。痛いほどに素肌に伝わる。

「おい、ばかピカ」

声が聞こえた。と、思ったらシートを乱暴に引っ張られた。

「おいこら、いつまで寝てんだ！」

半屋だ。そう分かった途端、シートを握る力が緩んだ。

流れるように白い布が奪われる。

僕は、ゆっくり顔を上げた。

透けるような金髪ドレッド。銀色の装飾品。鋭い目つきで、僕を見下ろす半屋が

いた。

寒い。

半屋が、奪い取ったシートを僕に投げた。無造作に、僕を覆うシート。僕はそれ

を羽織って、躰を起こして座った。

「な、何の……用？」

上手くしゃべれない。

「オマエ……朝霧をふったらしいな」まるで侵略者を見るような冷たい眼差しが、

僕に向けられた。

視線を逸らす。

「あげくに、三週間以上も大学に顔だしてないだろ。……朝霧のこと、好きじゃ

なかったのか」

比重の重い声が降ってくる。

僕は顔を伏せて、ベッドのシマシマ模様を眺めた。

何も言わない。言いたくない。覗かれたくない。

半屋が。溜息をついた。そして足音。遠ざかる音、また戻ってくる温もり。

「とりあえず、これ着ろ」

僕の視線の先に、その投げられた物が入った。グレーのキャミソール。以前、半  
屋がもってきた服の一つ。

「裸のまま外に出るわけにもいかないだろ。さっさと着ろ」

僕は、言われるままに、それを着た。

「ちよっと付き合え」

有無を言わず気のない命令をして、半屋が、僕の腕を掴んでベッドから離す。

「ちよ、ちよっとって、どこに……」

弛緩した身体がよるめく。何か踏んだ。炬燵に足がぶつかると、

半屋が、強引に僕をベッドから遠ざけ玄関へ向かっていく。玄関戸に手を掛けて、

半屋が、振り返った。

「海だ」

僕は、木枯らしに揺られる紅葉のように、為すがまま部屋から連れ出された。

真つ赤なミニの助手席に押し込まれた。

半屋は、無言でエンジンを掛ける。

狭い路地から国道へ、そして高速道路へ乗った。

エンジン音がやや大きくなる。ロックを演奏するように、アクセルを踏んだり離したり、まるでエンジンを虐めているようだ。半屋は、無言だった。横目で覗くと、真つ直ぐ前を向いて運転している。途中、右手でシガーライターをとって、たばこに火をつけた。そして加速する。運転を楽しんでいるようには思えなかった。まるで敵機から逃れようとしているのか、それとも敵機を探しているような目だった。僕は、窓から風景をみた。近くの防音壁の編み目が速く流れ、遠くの山は、すり足で過ぎ去る。雲は高く、レースのような灰色。弾む車体。背中に振動が伝わる。高いエンジン音。一所懸命走っているように思える。

前方の車に追いつく。直ぐに追い越し隣の車線に移動。何度も車線変更。半屋は、車ではなくて戦闘機を操縦しているつもりのかも知れない。追い越し様に、口元を釣り上げた。

音楽を聴かない。カーステレオを乗せていない。エンジン音が、半屋は好きなのだ。ヘビメタのロックより、エンジンの悲鳴のほうが心を揺さぶる。

高速道路を下りて、またすぐに有料道路に入った。半径の長そうな山沿いのカーブを曲がると、海が見えた。じらすように長いトンネルに入る。そして抜けると半屋の横顔に灰色の海の背景。濁ったような空と、不機嫌そうな藍色の海。海沿いを走る。ガードレールの向こう側に、テトラポットが竜宮の遣いより長い列をなしている。扇状の道が続く。前方後方、対向車線にも車はない。人もいない。この町の方は冬眠中なのだろうか。

砂浜が見えた。

白とアイボリーの斑模様の砂浜。

時計を見る、もうじき日が沈む。

何時間も二人。

小さな車の中。僕たちは、無言。

エンジンのサウンドだけが、お喋りしていた。

方向指示器を上げた。右へ曲がります。

広い避難所へ車を入れる。

ゆっくり減速。エンジンが溜息をついているよう。そして停車。サイドブレーキを上げ、エンジンを切った。

微かに波の音がする。僕は海をみた。すると、半屋の横顔も視界に収まる。

半屋は、真つ直ぐ前を向いていた。ちらりと僕も前をみた。砂浜へ下りる階段と、投げ捨てられた空き缶と火花がある。

気まぐれな拍で波の音。

エンジンは、喋り疲れたように眠っている。

背中には、震動の余韻が熱となって残る。

半屋が、ポケットからたばこを取り出し、火を付けた。灰皿を出して、火をつけたばかりのタバコをトントンと叩いた。深く吸って吐き出す。白い灰がフロントガラスにぶつかって、霧散した。その散らばりの潔さは、別れと悲しみが無いようで綺麗だった。

半屋が、窓を開けた。わずかな隙間。そこに煙を吐く。右手にタバコをもったまま。

「悔しいだろ……朝霧をふつたの」半屋が、僕を見ずに言った。

選ばれた風が、車内に入ってくる。冷たい微かな風、けどむせ返るほどの潮の匂い。

二秒、呼吸を止めた。

「馬鹿にするために、わざわざ 海まで来たの？」

僕は、半屋を見て訊いた。

半屋が、首を振る。タバコをくわえ、煙を吸って吐く。

「なんで、断ったんだ？」

灰皿にタバコを押しつけた。

鋭い視線が、僕に突きささる。

僕は、ただ、怖くて、俯いた。

何も言わない。言いたくない。

言葉に整理できるほど、まとまった感情じゃない。

理由はもう、壊れている。

「女だからか？」

半屋の声が……茨が、頬に擦れる様に痛い。

「朝霧は、男のオマエが好きで、けど、オマエはもう男じゃない。だからふつたんだ」

遠慮も慈愛も捨てたような声。

灰色の裾を握る。皺が、僕を噛む。

「おい」半屋の手が項を掴み、乱暴に僕の顔を引き押せた。目の前に半屋の顔。黒い瞳。憤怒を反射しているような瞳孔。呼吸を抑える。口を閉じた。歯を食いしばって、唇を噛んだ。

「男だ女だなんて、些細なことだつて言ったじゃねえかよ。……このビビリ。結局一番気にしてんのはてめえだろ。朝霧が好きだけど、女同士だからとか、そんなクソつまねえこと気にしてふつたんだろ。僕は男だなんて威張りくさつていて、結局、恥ずかしいだろ。男なのに女の身体してんのが。あ？」

目の前で半屋が怒鳴る。

風圧に頬が痺れる。

網膜が揺れる。

滲む。

苛々する。

なんで、なんで、なんで……。

どうして、どうして、どうして。

半屋に……そこまで言われなきゃいけないの……。

「お、おまえに……」色々混ざって喉が震える。

息をすう。

「おまえなんか、なにが分かるんだよっ」叫んだ。

「僕がどんな気持ちか分かる訳ないだろ、オマエなんかにつ。なにの……なんでそんな事言うだよ……なんで……そこまで……関係ないだろ、……」

目を瞑った。

「全部変わったんだよ。突然、色々変わったんだよ。僕が、僕だったのに、変わって、たくさん、たくさん、変わんなきゃいけなくなつたんだよ。分かる？ 家族に会うのがどれだけ怖いかな、友達も離れないといけなし、この先、たくさん嘘つかないといけない……今までを隠して、今から偽装して生きていかなといけないんだよ、……。好きだよ……朝霧さんの事、好きだよ。大好きだったよ。でも、どうしても言えない……好きだから嘘つきたくないんだ。だって、いつか、好きだったことも。嘘になりそうで怖いんだよ……だから、だから……」

声が上手く出ない。

言葉が紡げない。

あれ……、なんて言いたいのかわからない。

僕は、何を伝えたいのか、わからない。

疎通する言語を忘れた。

感情を言葉にコンバートできない。

でも、

これだけは、

分かって……欲しい……。

「半屋……」目を見た。「お願いだから……」

半屋が頷いた。

「ずっと、友達でいて……半屋だけは、変わらないで……」

答えを聞かせて……。

剥き出しの言葉をちようだい……。

それだけ、ずっと変わらない言葉にしたい。

たくさん隠して、

みんな騙して、

なにもかもに嘘をついて、

過去からのものが、変わっても、

半屋だけは、過去から……今も……お願いだから、これからも……。

「ピカちゃん」半屋の声。

僕のうなじを掴んだ、半屋の左手が緩む。項に掌の温もり。骨のずいまで染み込むよう。

半屋が、ぼくを見る。

ぼくも、半屋を見る。

「オレ様は、男だ」

半屋が言う。

「ピカちゃんも、男だ」

半屋の左手が肩に。

「でも……」

呼吸を止めた。

引き寄せられる。

倒れ込むように迫ってくる。

不思議と、心地いい。

だから、呼吸を止めて、半屋を見た。

「オレの前では、おまえは女だ」

僕の唇をふるわずまで近づいて囁き、そのままキスをした。

三秒、半屋の瞳を見た。

そこに僕がいた。

何かを隠している、僕がいた。

立証は困難な境界。

熱い柔らかさ。

朦朧としていく頭脳。

境界が朦朧か曖昧に。

似ている。

これはきつと、あれに似ていて、  
喜ばしい  
喪失……、  
墜ちていく。

僕が、墜ちていく。

今度はどこへ、墜ちていくのかな。  
とろけていく境界線。

もとから自然界に境界線はなかった。  
だから、もどっていく僕達。

この瞬間にだけ、墜ちていく。  
だから、今、ここには、

愛情も、  
友情も、

恋も、  
哀も、

温もりも、  
冷たさも、

大人も、  
子供も、

女も、  
男も、

きつと望みもなく……魔法がある。  
魔法でとけあう。

正しいも間違いも、  
美しいも醜いも、

正常も異常も、  
善いも悪いも、

時間も空間も、  
天才も凡人も、

作為も恣意も、  
曖昧だから、二人も一人に……。

半屋は、目を瞑る。  
ぼくも、目を瞑る。

半屋は、ぼくの、  
ぼくは、半屋の、

一部となった。

小説を書く、友人は言った。  
オレはどんな話しを書くのか訊いた。

するとピカちゃんは、子供のように照れ笑いを浮かべた。  
「魔法のどらやきのお話。そのどらやきを食べると、どんな願いも叶うんだ。死んだ恋人が蘇ったり、猫になったり、ずっと子供でいられたり、天才になったり、男が女になったりね」ピカちゃんは笑って、両手で砂を掬った。

指の間からこぼれ落ちる砂を、悲しそう目で追った。立ち上がって、波打ち際を歩き出した。  
夕日の赤も覆う、重い雲。  
協調性の高い海面は、空に似た色に。  
空の灰色は、きつと誰かの忘れものか、捨てたもので溢れている。  
大人になると意識したときには、もう、たくさん捨てている。  
子供ものときには、当然だと思ったものを、  
価値も意味もないから、無駄だと蔑み、捨ててしまう。  
代わりに、きつと、なにかを得たのだろう。  
雲より軽い、ぼくつと出たお腹のように、ふくらみ易い勘違いと、無邪気に降る雪さえ抵抗と感じる柵を、拾ったのだろう。  
子供の頃を切り捨てたのに、  
失うことを恐れている大人、  
その違いに気付いたとき、きつとオレも、ずっと子供ではいられない。  
けど、その時まで、もう少し、子供っぽくしよう。  
ピカちゃんが、波打ち際で足をばたばたしている。キャミソールの裾が黒色に近づく。それでも、やめようとせず、波を蹴って、笑っている。  
「ねえねえ、半屋。これ見てー」  
ピカちゃんが何かを掲げている。  
「なにそれ？」  
「びっくり。天秤だよ」  
オレには、ただの台座と棒にしかみえなかった。  
でも、ピカちゃんは、誇らしげにそれを見せる。  
まるで、子供のようになんて笑って、オレを呼ぶ。  
オレは、ポケットから小さな紙袋を取り出した。  
掌に収まる白い紙袋。丸い柔らかいものが入っているだろう。

そして、味覚に甘く、夢にはザラザラ無味の何かが。  
「あ、雪……」ピカちゃんが空を仰いだ。

オレは、水平線をみた。

仄暗い海辺。灰色の雲からこぼれ落ちる雪

海面は、その小さな子供を受け止める。

なにも感慨もなく、なにも求めず、なにも叶えない。

季節がもう一度、冬へ。

けど、灰色から幻想を含んだ玄空へ。

白は雪が拾って、僕たちにおっそわけ。

少しづつ、忘れ物を返してくれる。

ただし、どこへ届くか、溶けてみないと分からない。

触れた雪が、丸くなる。

表面に写ったオレ。

誰だよ君は……、ああ、そうか、

はじめまして、冬。

「半屋。ちよつと泳がない？」

ピカちゃんの声が高い。気分が高揚しているのかもしれない。無邪気にはしゃいでいる。騒がしいが、今日は、微笑ましい。

「風邪ひくぞ」

「だったら、トンネル作る、トンネル」

ピカちゃんは砂浜に座り込んで、両手で砂をかき集める。

「ほら、半屋も早くー」

砂のついた手で手招きする。

オレは、溜息をついた。

「はいはい、今行くよ」

オレは、よし、と気合いを入れて、ピカちゃんのもとへ歩き出した。

今夜、変わろうと決意した。

もう子供っぽく「オレ」なんて言わない。

どんなことして変わるかは、恥ずかしくて言えないけどね。

オレは、もう一度、雪が降らす雲をみた。

「なあ。ピカちゃん、……男に戻りたい？」

「ん？ ……今度は、半屋が男になってみれば」

無邪気に笑う、男の子だった女の子。

オレは、手に持っていた紙袋を海へと投げた。

小さな別れを言っ、沈んでいく。

かわいそうに……、  
オレ様に、捨てられる運命だったのだよ。

グッバイ魔法。  
オレ様、あんこは嫌いだからさ。